

在韓日本人妻高齢者のライフコースと社会生活 —同化政策から社会的排除の中で—

○ 東京経済大学 奥山正司 (257)

キーワード：在韓日本人妻高齢者 ライフコース 社会的排除

1. 研究目的

これまで、在日韓国人高齢者を対象とした調査研究はかなり取りあげられてきたが、在韓日本人妻を対象とした調査研究については、慶州ナザレ園で暮らしている高齢者を取りあげた上坂冬子等いくつかのルポルタージュで紹介されたものがほとんどである。そのため、在韓日本人妻高齢者の社会生活を中心としたライフコースや彼女らの生活と社会的サポートネットワークおよび社会的排除や貧困などについては、ほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、在韓日本人妻高齢者のライフコース及び現在の社会生活についての状況を明らかにしたうえで、韓国人社会のなかで生活している彼女らの生活問題及び社会的排除等について検討し、その課題や政策的対応を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査の対象は、ニューカマーズとして韓国に渡った人々ではなく、在韓日本人妻高齢者の唯一の組織である「芙蓉会」のメンバーの高齢女性である。彼女らは、第二次世界大戦の終戦記念日である1945年8月15日（日本は敗戦日であるが、韓国は勝戦記念日）を境として、その多くが結婚している韓国人の夫と共に韓国へ渡った人々である。

我々は、そうした対象を把握する方法としては、個人に対する歴史的イベントの烙印に注目したライフコースの視点及びそのアプローチが最良の方法であると考えた。エルダーによれば、ライフコースとは、個人が年齢別に分化した役割と出来事を経つつ、辿る道筋である。また、それは、歴史的イベントの烙印を背負って人生行路を歩む個人をコーホートごとにまとめることにより、歴史的イベントのインパクトを階層差や地域差をも含めてくっきりと浮かび上がらせることができるという（森岡清美、2005）。さらに、ライフコースアプローチが年齢に注目しているのは、個人を空間的ではなく時間的な位置に即して捉えようとすることであるとともに、ある時点の観察で終わらず、時間の推移に伴う加齢に即して個人を観察しようとしているからである。こうしたアプローチにより、在韓日本人妻高齢者のケーススタディを行なうことができたが、事前に、日本国内で行なうような標準的なラポールのとり方では、実際の調査には通用しないことが分かっていた。したがって、対象者に辿りつくまでには、かなりの時間と労力を要した。すなわち、これまでに、我々は韓国国内において、在韓日本人妻高齢者と数多く接触し、彼女らとの話し合いを数多く行ってきた。また、彼女らが好む日本人としての食べ物（梅干やお茶漬け等）を一人一人にお土産として数回にわたって贈答してきた。さらには、韓国国内での温泉旅行に同行したり、

彼女らの一部が日本へ一時帰国する際には数多くの援助を行なったりして、ラポール形成に努めてきた。調査は大別して2つの方法をとった。一つは、「芙蓉会」の名簿に記載されている項目の分析であり、具体的には、韓国全土にわたって生活している（いた）彼女らの①氏名②生年月日③居住地④帰化の有無⑤生存状況⑥本籍地（日本）⑦夫や子どもとの同居の有無等の7項目である。これらの項目をデータ入力し、SPSSによって分析を行った。二つめは、ソウル支部（京畿道を含む）で交流を行っている対象者に面接し、ライフコースアプローチによって、彼女らを含む「芙蓉会」会員の社会生活や社会的な排除及び貧困の状況を把握することにした。

3. 倫理的配慮

「芙蓉会」の対象者に、調査（1）の名簿項目の分析については、対象者名簿の母体である「芙蓉会」総会での承認を得ること、調査（2）のケーススタディの調査結果については、研究目的以外では使用しないこと、分析に当たっては個人が特定されるような記述は行わないこと等を説明し、これらに同意した対象者のみを調査することにした。

4. 研究結果

調査（1）については、244名のケースをSPSSにて分析した（2011年3月現在）。生死の状況は、生存137人、死亡64人、行方不明43人であった。国籍の状況は、日本国籍91人、韓国籍85人、二重国籍（現在は、違法）71人であった。生存者の平均年齢は86.5歳、最高年齢は101歳、最低年齢は59歳（在韓日本人妻高齢者の二世の娘）であった。そのうちソウル支部の会員は、生死不明を含めて79人であった。調査（2）については、ソウル支部のうち、9名を対象としてケーススタディを行った。その結果、韓国人の夫は日本人妻との結婚が判明すると韓国社会から強い批判と差別の対象となっていた。そのため、彼女らは離婚・離別されているケースがほとんどであった。離婚後、彼女らは仕事らしい仕事にも就けず、生活のあらゆる部分で社会的排除の対象になっていた。生活費は、日本円に換算すると1ヶ月2万円程度、住宅の広さは、2畳から4畳半程度の広さであった。社会的な接触については、近隣との接触は皆無に等しく、公的なサービスもほとんど受けていなかった。唯一、日本国籍の者は「芙蓉会」を通して日本政府から小額の援助が行われている状況であった。

5. 考察

日本の長期に亘る同化政策、皇民化政策、創氏改名の後、終戦後の韓国社会では、日本人に対する差別・偏見が大きく、特に在韓日本人妻高齢者は、韓国に渡った後、ライフコース全般に亘ってその影響を受けていた。そのため、彼女らは、地域社会では出来るだけ目立たない行動に徹し、近隣とのつきあいはきわめて乏しかった。唯一、「芙蓉会」の集会在楽しみとなっているが、会員の高齢化により、現在は会の存続そのものが危ういものとなっている。彼女らにとっては、戦争はまだ終わっていない。そのためにも、日本政府には、人権に立脚した生活支援等の緊急かつ積極的な対応策が望まれる。